

SAGA ART BRUT NETWORK

2019 — 2020

令和1年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書



SAGA ART BRUT NETWORK 2019—2020

令和1年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

目次

2 はじめに

Chapter 1 事業概要

- 4 障害者芸術文化活動普及支援事業について
- 5 SANC(サンク)について
- 6 SANCが目指すこと
- 8 地域の現状と課題

Chapter 2 事業報告

- 10 障がいのある方の芸術活動を支えるためのスキルアッププログラム
- 12 「障がいのある人の表現とは?」を考えるセミナー
- 14 たくさんの人に見て欲しい! ○○な展覧会を一緒に作りませんか?
- 16 がばいアーティストたち これ誰が描いたの?vol.2
- 20 日常生活の中で、どんな地味なことでも魅力に変える 身体表現ワークショップ
- 22 第3回 スター発掘プロジェクト in 佐賀
- 26 障がいのある方の作品の魅力を伝えるための ブランディング・ワークショップ(入門編)
- 28 障がいのある方の創作活動にまつわる 権利擁護「所有権・著作権」
- 29 アトリエ・サンク
- 30 佐賀県との連携
- 31 大学との連携
- 32 相談支援
- 33 芸術活動についてのアンケート

Chapter 3 今年度の評価

- 35 アウトプット数値
- 36 研修等プログラム参加者アンケート
- 38 協力委員会による評価コメント
- 44 成果と課題
- 46 情報発信資料

はじめに

ある日、アトリエ・サンクで障害のある作家さんと現役の大学生が一緒に作品を作っていました。

お互いに弾む会話があるわけではありませんが、そこには、作品を中心として、ゆったりとした時間と、緊張が段々とほぐれて温かくなっていく場の雰囲気と、確かな人と人の「つながり」が生まれていました。

障害のある作家さんたちは、学生さんと一緒にうれしそうな表情を見せるようになり、学生さんと活動することが楽しみになりました。

学生さんたちは、自分たちが障害のある人たちが活動する施設を訪問し、自分たちが感じてきたことを展示会にして発表しました。

作家さんも、学生さんも、芸術文化活動を通じて出会い、一緒に活動するなかで、お互いに影響を受けながら、それぞれの生活や人生に彩りが増えていったように思います。

当法人では、今年度も佐賀県文化課による「佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業」を受託させていただき、SANCを中心に様々なプログラムを実施してきましたが、私たちが目指してきたことのひとつがこのエピソードに現れているように思います。

私たちの原動力のひとつは、芸術文化活動を通じて「障害のある人たちの魅力を多くの人に知ってほしい」という想いです。

社会福祉法人はるでは、佐賀において障害のある人たちを地域で支える活動を行ってきましたが、その中で、お一人おひとりの個性や人となりの魅力をたくさん感じてきました。

障害のある人たちが生み出す作品のなかには、これまで私たちが感じてきたその魅力がそのままストレートに表現されていることも多く、それらの作品を通じて多くの人たちにその魅力が伝わってほしいと思っています。

そして、作品や創作活動などの様々な機会を通じて、多くの人たちが障害のある人たちと出会い、人と人としてつながり、お互いの生活や人生に彩りを増やしてほしいと願っています。

令和1年度のプログラムを実施できましたのも、協力委員の皆様をはじめ、たくさんの方々にご協力いただいたおかげです。この場を借りてお礼を申し上げます。

そして、私たちにたくさんの楽しさやワクワク感、感動をいただいている作家の皆様にご心より感謝いたします。

社会福祉法人はる 理事長
福島 龍三郎

Chapter 1

事業概要

障害者芸術文化活動普及支援事業について

SANC(サンク)について

SANCが目指すこと

地域の現状と課題



「くらせるロボット」 吉岡翼

障害者芸術文化活動普及支援事業について

芸術活動は障害者にとって重要な社会活動の一つであり、近年では、既成の概念にとらわれないその芸術の特性が、国内外において一定の評価を受けるようになるなど、芸術活動を通じた障害者の社会参加の一層の促進が期待されています。

「障害者の芸術活動支援モデル事業」（平成 26~28 年度実施）で培った支援ノウハウを全国展開することにより、障害者の芸術文化活動（美術、演劇、音楽等）の更なる振興を図っています。

「都道府県」、「ブロック」、「全国」という 3 つの活動エリアを設け、それぞれのエリアに支援センター、広域センター、連携事務局といった支援の拠点を設置し、2019（令和 1）年度は全国 32 の都道府県において 36 団体が事業を行っています。

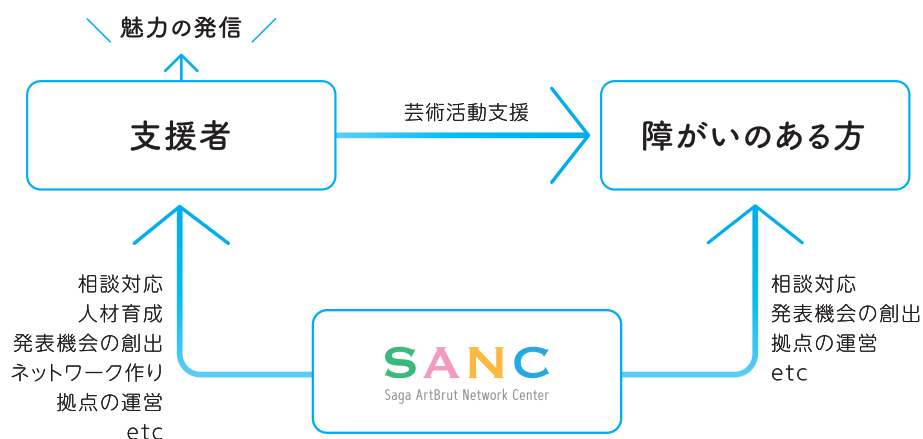
都道府県の「障害者芸術文化活動支援センター」は、芸術文化活動を行う障害者本人やその家族、障害福祉サービス事業所、文化施設、支援団体等をサポートする拠点として活動しています。

SANC（サंक）について

2015年8月、社会福祉法人はるは、厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」の助成を受け、障がいのある方が芸術活動を通じて豊かに生活できる社会を目指し、“Saga ArtBrut Network Center（SANC）”をオープンしました。

2018年からは「佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業」の支援センターとして、その活動を継続し、佐賀県において芸術活動に取り組んでいる障がいのある方、支援者の方、関心のある方などを対象に、「人材育成」「相談対応」「発表機会の創出」「ネットワーク作り」「拠点運営」など、障がいのある方の芸術活動普及支援のための、さまざまな取り組みを行なっています。

障がいのある方の芸術活動を支えるために



SANCは、障がいのある方の芸術活動を支援されている方たちへのサポートを軸として活動しています。その取り組みを通じて、障がいのある方と芸術活動を共に楽しみ、その表現の魅力を世の中に届けてくださる“支援者”が増えることで、障がいのある方が芸術活動に取り組みやすい環境を広げていきます。

社会的インパクト評価に基づいた事業計画

アウトプットだけでなく、アウトカムを指標の一つとしながら事業の達成度を計ります。

アウトカム(成果)の“〈後期〉文化”を目指して、“〈初期〉環境” “〈中期〉普及”を積み上げて行きます。

		インプット	活動	アウトプット
受益者	障がい者	・ヒト 支援者 アート専門家 ・モノ 施設/会場 機材 画材	・展覧会 ・ワークショップ ・ステージイベント ・相談 ・交流 ・調査・発掘の対象 ・アトリエ	・出展者数 ・会場数 ・相談数 ・相談の種類 ・発掘された作家の数
	支援者	・ヒト アート専門家 まちづくり 障がい福祉支援者 ・モノ 施設/会場 機材 画材	・ベシックスセミナー ・ワークショップ ・展示研修 ・グッズ化セミナー ・パフォーマンス ・相談 ・展覧会 ・ステージイベント	・出展者数 ・会場数 ・相談数 ・相談の種類 ・発掘された作家の数 ・研修の参加者数 ・関わった支援者数 ・グッズ化された件数
	一般	・ヒト 障がい者 障がい福祉支援者 ・モノ 施設/会場	・展覧会 ・ワークショップ ・パフォーマンスステージ	・来場者数 ・会場数 ・参加者数

障がいを持った方が芸術活動を通して豊かに暮らし
誰もが多様な文化を認める豊かな社会へ

アウトカム		
〈初期〉	〈中期〉	〈後期〉
環境(場所・人材)	普及(つながり・流通)	文化
・創作できる場所が増える ・発表の機会が増える ・アート活動に理解のある支援者が増える ・アート活動を通して表情が良くなる	・芸術活動の選択肢がある ・グッズ化の機会が増える ・展覧会に出展する機会が増える ・一般の方の認知を得る ・アート活動を通して自信を持つ	障がいを持った方が芸術活動を通して豊かに暮らし 誰もが多様な文化を認める豊かな社会へ
障がい者のアート活動に関する ・知識が広がる ・ネットワークが広がる ・抱える問題が見える ・障がい者とのコミュニケーション能力が向上 ・“表現”を楽しめる支援者が増える ・価値観が変わる	・発信するスキルが身につく ・グッズ化の支援スキルが身につく ・展覧会の開催スキルが身につく ・パフォーマンスの支援スキルが身につく ・障害者への支援スキルの向上 ・問題の解決及び実践できる ・地域で活動している団体や事業所と連携する ・発信力の高い支援者が増える	
・アートを楽しむ ・会場へ足を運ぶ ・障がい者のアート活動を通して、価値観に変化が現れる	・お気に入りの作品や作者ができる ・グッズ化された商品を購入する ・展示会に足を運ぶ機会が増える ・障がい者のアート活動を通して、障害への理解が進む	

地域の現状と課題

実施地域の現状

佐賀県では、文化・スポーツに関する施策を総合的に推進していくための体制の充実と強化を図るため、平成24年度に新たに文化・スポーツ部（現：文化スポーツ交流局）が設置され、障がいのある方の芸術・文化活動について、障害者施策の担当部局ではなく、広く文化全般の施策を担っている文化・スポーツ交流局文化課で所管されている。

平成24年度には「第12回全国障害者芸術・文化祭さが大会」（バラエティ・アート・フェスタさが2012）が開催された。この全国大会の開催をきっかけとして、障がいのある方の芸術文化活動の支援をさらに強化・推進していくため、佐賀県独自に平成27年度まで「バラエティ・アート・フェスタさが」が開催され、障がいのある方の芸術文化活動の裾野を広げるための取組が行われてきた。また当法人では平成27年度・28年度の2年間に渡って「障害者の芸術活動支援モデル事業」（厚生労働省）を受託し、「裾野を広げる」「一歩目を踏み出す」をテーマに佐賀県における支援者育成のセミナーやコンサルテーション等を実施した。また平成29年度に「障害者芸術文化活動普及支援事業」、平成30年度に「佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業」を受託し、「裾野を広げる」活動を継続しながら、その次のステップとして「表現の発信」を視野に入れたセミナーやワークショップ等を実施した。

アンケート結果の比較から見える現状と課題

平成27年度および平成29年度、佐賀県文化課により、障がい者サービス事業所、障がい者（児）福祉関

係団体、精神病院、特別支援学校を対象に「障害者支援事業所等における芸術活動についてのアンケート」が実施された。平成27年度と平成29年度のアンケート結果を比較すると、芸術活動に「関心がある」とした事業所は64ヶ所から135ヶ所、「行っている」とした事業所は33ヶ所から70ヶ所に倍増し、佐賀県における障がいのある方の芸術活動の裾野が着実に広がっていることを示す結果となった。

また、その広がりと同時に、地域や現場の実態に沿ったサポートや施設間のネットワーク構築等の課題が浮かび上がった。「芸術活動を行っている」と回答した事業所の「芸術活動における現状の課題」上位2項目は、平成27年度の「指導者の確保」「活動時間確保」から、平成29年度には「指導者の確保」「指導方法の確立」へと変化しており、芸術活動を取り入れた事業所の多くで、活動に取り組む上での知識やスキルに不安を感じている支援者が増加していることがわかる。

平成30年度には、SANCに前年度の166件を上回る244件の相談が寄せられ、その中で、特に創作環境に関して「アトリエ・サンクを見学したい」という相談が20件から37件に倍近く増加した。こうした相談内容と件数の変化から、障がいのある方の芸術文化活動の機運の高まりとともに、障がいのある方の芸術文化活動への関心が社会に広がり、特に障がいのある方とその家族の間で「芸術活動に取り組むことができる環境」の需要が高まる中、佐賀県では芸術活動に取り組む場所・人材の充実が改めて課題となっている。また、地域や施設における芸術文化活動を長期的に継続していくために、芸術活動を牽引していくことができる人材の育成が急がれている。

Chapter 2

事業報告

障がいのある方の芸術活動を支えるためのスキルアッププログラム

「障がいのある人の表現とは？」を考えるセミナー

たくさんの人に見て欲しい! ○○な展覧会を一緒に作りませんか?

がばいアーティストたち これ誰が描いたの?vol.2

日常生活の中で、どんな地味なことでも魅力に変える 身体表現ワークショップ

第3回 スター発掘プロジェクト in 佐賀

障がいのある方の作品の魅力を伝えるための ブランディング・ワークショップ(入門編)

障がいのある方の創作活動にまつわる 権利擁護「所有権・著作権」

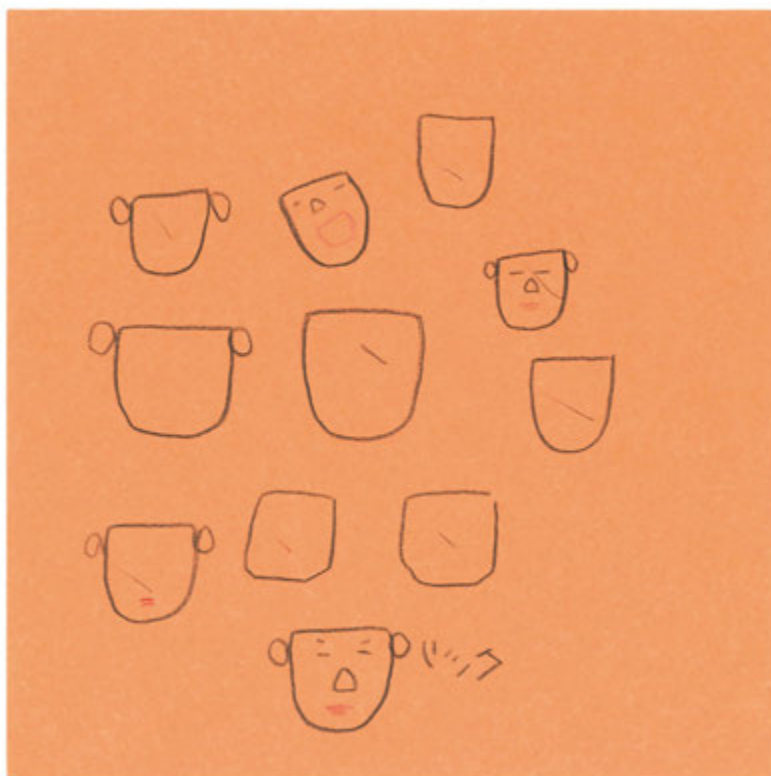
アトリエ・サンク

佐賀県との連携

大学との連携

相談支援

芸術活動についてのアンケート



Takaki Katafuchi

障がいのある方の芸術活動を支えるための スキルアッププログラム

「障がいのある方の 表現とは？」 を考えるセミナー

描く、歌う、発する、動く…
障がいのある方の表現に接した時、
その表現をどう受け止めていけば
よいでしょうか。
4名の講師と共に、
障がいのある方の表現に向き合い、
活かしていくヒントを探してみましょう。

【講演】

障がいのある方の 芸術活動から生まれること

講師 長津 結一郎
九州大学大学院芸術工学研究院助教 /
芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ構成教員

ほどこ、つくる、つむぐ
これがカプカブのくはたらくだ！

講師 鈴木 励滋
障害者地域作業所 カプカブ 所長 / 演劇ライター
小松原 修
うれしの特別支援学校 / ドラマディレクター

創作活動が「アート」だけでなく
「人生」にも広がるように

講師 原田 啓之
医療法人清明会 障害福祉サービス事業所
「PICFA(ピクファ)」施設長

日程 令和1年8月25日(日)
会場 ゆめぶらっと小城(小城市)

たくさんの人に見て欲しい！ 〇〇な展覧会を一緒に作りませんか？

自慢したい作品、お気に入りの作家を紹介しましょう！
昨年度、多くの反響をいただいた展覧会
「がばいアーティストたち」は、ここから生まれました。
紹介したい表現がある方、展覧会を通して発信スキルを身に付けたい方、
障がいのある方の表現に関心のある方、ぜひご参加ください！

講師 柳 健司 美術家 / 佐賀大学芸術地域デザイン学部教授
花田 伸一 キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授

障がいのある方の作品を活かすための ブランディング・ワークショップ(入門編)

「何のために」「誰のために」作品を活かしますか？
その「目的」や「大切な想い」を明らかにすることから
ブランディングは始まります。

講師 伊藤 友紀 よりそいデザイナー / HONOTA design 主宰

日常生活の中で、どんな地味なことでも魅力に変える 身体表現ワークショップ

身体表現を通して、視点が変わる。視点が変われば、
日常はもっと面白い！
「絵を描いたり何かを作ったり、アートなことはやってないけど…、
日常が魅力的で、もっと輝かせたい人がいる。
でも、どうして良いかわからない…。」
そんなことを感じている支援者の方は、ぜひ体験してください！

講師 小松原 修 うれしの特別支援学校 / ドラマディレクター

創作活動にまつわる 権利擁護「所有権・著作権」 ガイドラインに沿って作品規定を作ろう

講師 安永 恵子 弁護士 / 安永法律事務所

2019-2020

第1回
作品を持ち寄って見せ合おう

日程 令和1年7月26日(金)
会場 市民活動プラザ(佐賀市)

第2回
テーマ／コンセプトを考えよう

日程 令和1年10月4日(金)
会場 アバンセ(佐賀市)

第3回
展示方法を考えよう

日程 令和1年11月15日(金)
会場 アバンセ(佐賀市)

第4回
展示準備を整えよう

日程 令和2年1月10日(金)
会場 アバンセ(佐賀市)

ワークショップ in 鹿島

日程 令和1年10月13日(日)
会場 エイブル(鹿島市)

ワークショップ in 唐津

日程 令和1年11月30日(土)
会場 相知交流文化センター(唐津市)

ワークショップ in 小城

【ゲスト】鈴木 励滋
障害者地域作業所 カブカブ 所長 / 演劇ライター

日程 令和1年8月25日(日)
会場 ゆめぶらっと小城(小城市)

ワークショップ in 鹿島

日程 令和1年10月13日(日)
会場 エイブル(鹿島市)

ワークショップ in 唐津

日程 令和1年11月30日(土)
会場 相知交流文化センター(唐津市)

日程 令和2年1月17日(金)
会場 アバンセ(佐賀市)

展覧会

がばい
アーティストたち
これだれが描いたの?

「障がい者の作品展」という枠を超え、
より広く作品を届けたい。
そんな思いを展覧会にしましょう!



日程 令和2年2月16日(日)ー19日(水)
会場 ゆめタウン 佐賀 1階 セントラルコート

パフォーマンス・ステージ

スター発掘プロジェクト
in 佐賀



日程 令和2年2月23日(日)
会場 メートプラザ 佐賀



障がいのある方の芸術活動から生まれること

九州大学大学院芸術工学研究院助教 長津結一郎氏

ほどく、つくる、つむぐ、これがカブカブのへはたらくんだ！

障害者地域作業所カブカブ所長／演劇ライター 鈴木励滋氏

創作活動が「アート」だけでなく「人生」にも広がるように

医療法人清明会障害福祉サービス事業所「PICFA」施設長 原田啓之氏

ドラマディレクター／うれしの特別支援学校 小松原修氏

「障がいのある人の表現とは？」を 考えるセミナー

芸術活動に取り組むにあたっての心構えと大切なこと

様々な立場で、障がいのある方の“表現”に向き合ってきた4名の講師を迎えました

描く、歌う、発する、動く……。

障がいのある方の表現にふれたとき、彼らの行動をどのように汲み取っていけばよいでしょう。

支援者として、アートの活動に取り組む仲間として、ともに楽しみながら表現に取り組んでいくために、どんなことが必要でしょうか。

様々な立場で、障がいのある方の表現に向き合ってきた4名の講師の話から、

障がいのある方ひとりひとりの表現に向き合い、活かしていくヒントを得るための研修を開催しました。

参加者が興味のある分野を見つけ、展覧会・身体表現・ブランディングなど、

SANCが展開する人材育成プログラム（→P10）から好きなものを選んで参加できるよう、

さまざまな分野で障がいのある方との芸術活動を実践する4名の講師から、

障がいのある方の表現と向き合う上で基本的に必要な考え方や姿勢を学び、

参加者一人一人が深めていくためのきっかけとなる研修を目指しました。

【日時】令和1年8月25日（日）【会場】ゆめぶらっと小城 【参加者】46名

【講師】長津結一郎氏（九州大学大学院芸術工学研究院助教）／鈴木励滋氏（障害者地域作業所カブカブ所長／演劇ライター）

小松原修氏（ドラマディレクター／うれしの特別支援学校）／原田啓之氏（医療法人清明会障害福祉サービス事業所「PICFA」施設長）



参加者アンケートから

・発表する術ばかりを考えていましたが、「こうあるべき」という概念を捨てることなど、発表以前の、自分のスタンスの在り方や考え方を見直す貴重な機会でした。

・3人の講師の方のお話はとても分かりやすく理解しやすかったです。また、今回自分達が障がいのある方と関わる時に、どのように接していくべきかのヒントが得られたので、これから実習に行った際など活かしていきたいと思います。

・勉強になった! というよりも「面白かった!」というイメージが強いです。(笑) 支援も、こういう感覚を利用者の方に持っていただけるといいなあと思いました。

・人と関わること、知ることを大切にしたいと感じた。

・みなさんのお話、とても興味深かったし、共感できました。またがんばろう!! と思いました。

障がいのある人に対しての考え方を改めること。活躍していくことなどを知っていく必要があると思った。

・障がいのある方だけではなく、子供、高齢者、学生、社会人、それなりに生活できている人、できない人も含め、すべての人にとって大切なお話だったと思います。

・正直、佐賀でこういったプロジェクトが行われていることはつい最近までよく知らず、とても興味深くお話をさせていただきました。支援者としてかわる際のスキルや、具体的に取り入れられるプログラムなど知れる場があれば参加したいと思います。

・障害児教育について学んだり、今回のようなイベントに参加したりするたびに、障害のある方への支援で、その人がやりたいことを仕事にできることとか、無理のないようにするといったことが大切であるとは感じるのですが、じゃあそれは健常者と呼ばれる人にとっては違うのだろうか、と考えてしまいます。それでも私たちは「好きなことを仕事にすればいいじゃん」と言ってもらえることはあまりないし、一体何が違うのだろうかと考え始めるとわからなくなります。

・講師の方のお話はとてもわかりやすかったです。また、障がいのある方と関わる時にどのように接していくべきか、ヒントが得られたので、これから活かしていきたいと思います。



たくさんの人に見て欲しい！

〇〇な展覧会を一緒に作りませんか？

紹介したい作者・作品がある、発信スキルを展示を通して身に付けたい
障がいのある方のアートな仕草や振る舞いを何とかして伝えたい
既存の枠を超えて、より広く作品を届けたい、そんな思いを形にします

障がいのある方の保護者や施設の職員など、支援者を中心とする実行委員会を組織し、アドバイザーの柳健司氏、花田伸一氏からサポートを受けながら、障がいのある方の展覧会を組み立てていきました。「作家・作品紹介」「展示コンセプト」「展示方法・レイアウトの検討」「展示準備／作業」など、展覧会づくりのプロセスに見立てた全4回の委員会への参加を通して、作品の発信にかかわる支援スキルアップを目指しました。支援者として、障がいのある方の表現といかに向き合い、どのように汲み取っていくべきか。鑑賞者には何を感じてもらい、何を持ち帰ってもらいたいか。具体的なこと、抽象的なことを交互に考えるなかで、少しずつ見えてくる参加者の思いの束をもとに、アドバイザーが整理し、展覧会の軸を作っていきます。アーティストの作品、実行委員それぞれの思い、そしてアドバイザーが持つプロの視点。この3つの組み合わせによって、展覧会「がばいアーティストたち vol.2」が作られました。

〈第1回〉令和1年7月26日(金) 〈第2回〉令和1年10月4日(金) 〈第3回〉令和1年11月15日(金) 〈第4回〉令和2年1月10日(金)

【会場】第1回:佐賀市市民活動プラザ／第2～4回:アバンセ(美術工芸室) 【実行委員会】37名

【アドバイザー】柳健司氏(美術家／佐賀大学芸術地域デザイン学部教授) 花田伸一氏(キュレーター／佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授)

✎ 実行委員による振り返り

・家で何気ない日常の中で、裏紙に描いた絵がゆめタウンのど真ん中にあり、多くの人の目に触れているということがとても不思議な気持ちになりました。しかし、その日常の中から生まれた作品だからこそ、よりそれぞれの作家さんの個性やこだわりが感じられるものとなっていたんだと思います。また映像が流れていたのも、より日常の姿がわかり良かったと思います。

・およそ一年間かけてイベントづくりの体験をさせていただきました。障害をもつ作家たちやその家族、施設などで働く人たちや関係者などさまざまな人が、時間をつくってあつまり、作品をもちより話し合い、会場づくりもおこないました。専門家の助言や展示の仕方、製品化の手伝いをうけ、たくさんの人にも見てもらえる、ちょっと"自慢できる"展覧会となりました。これからも、誰もが気軽に楽しく参加できるワークショップとして、つづいたらよいと思います。

・2回目の今回、初めて年間を通して研修に参加させていただきました。展覧会を開催するにあたってのノウハウを学ぶことができてとてもよかったです。『作り手の熱量が観る人に伝わる』という言葉が印象的で、何をどう伝えるのか?をみんなで真剣に考えた時間を共有できた経験は貴重でした。

・利用者様が描いた絵画や写真が、一つの作品としてゆめタウンで展示され、たくさんの方に見ていただき、利用者様、私自身も励みとなりました。印象的だったのが、お客様が作成した方の話を聞いて下さり、障がい者への理解に繋がったと感じました。

・Tシャツをみるだけに限らず、じっくりと冊子を読みながら回っている方の姿が印象に残りました。展覧会当日は何名かの作家さんが制作されていましたが、制作スペースが端の方にあつたためか、気づかずに通り過ぎてしまう方が多く見受けられたので、目に留まるような工夫があれば、なお良かったように思いました。

・今回の展示会のコンセプトは、前回の手法+新たな試みの融合だ。その試みの一つが、アーティストのライブパフ

ーマンスである。アーティストがその場で描いた作品を来場者に手渡すと、みな喜び感動に包まれたことが特に印象的であった。今回は数名のアーティストで小規模な範囲に終わったライブパフォーマンスであるが、次回は大々的なパフォーマンスを望む。

・作家が実際に製作できるコーナーは、想像以上に多くの方が良い表情で描かれていて感激した。見る人にはその人が作家かどうか、またどのエピソードの方かわからなかったのは少し残念だったかも。



・作家さんと作家さんの家族、施設の方々、学生という様々な立場の意見を一度に聞ける場があるのは良かったです。また、話し合いの中で実際の作品を目にする機会が多かったことも印象に残っています。自分自身の視野も以前より広がった気がしたので、実行委員会の話し合いの回数がもう少し増えても良いのかな、と思いました。

・前回よりも、たくさんの方が参加してらっしゃって、障害者アートを理解し、協力、支援しようと言う方々がこんなにいらっしゃる事に、驚きと嬉しさを感じました。思い出せば、昨年、ゆめタウン佐賀で展覧会の会期中に、自分のお子さんも、障害をもってらっしゃるとの事で、「とても絵が好きでよく描いてます。いいですねっ…うちの子にも、このような機会を与えられたら…」とお話された方も、いらっしゃいました。その事を思い出すと、今回の参加が多いのも納得できました。お陰様で、私がアート支援しているお子さんも、色んな表現に触れ、刺激をもらう事ができ、間接的にも、このような仲間がいる事で、心強くなれると思います。

・私は、「がばいアーティストたち」の参加は初めてでした。参加者が展覧会のテーマから飾り付けまで意見を言い合い、実行していくのは斬新だなと思いました。一日だけでしたが、家族と展覧会に行きました。自分のイラスト付きTシャツを見つけた時は嬉しかった。



がばいアーティストたち これ誰が描いたの？ vol.2

アートとしか言いようの無いものをTシャツにしてみました。

「〇〇な展覧会を一緒に作りませんか？」に参加した実行委員会により形になった展覧会。
県内外30名の“がばいアーティストたち”の作品を、Tシャツをキャンバスにして展示しました。
県内最大規模のショッピングモール「ゆめタウン佐賀」のセントラルコートにて開催。
会期中、ゆめタウン佐賀を訪れた多くの方に作品を見てもらえる機会となりました。



「がばいアーティストたち」—— 共同体と市場の中間領域

昨年度に引き続き今年度も「がばいアーティストたち」展を開催する運びとなりました。展示方法は昨年と同じく作品をTシャツにプリントして見てもらうようにしています。その際、周りの空間から完全に区切るのではなく自然と溶け込むように工夫する点、コトバによる説明を減らしてまずは色・形などの造形から味わってもらうという点も昨年と同じです。

昨年から変化したところは、参加人数が増えた点と、展示場所に「ライブ」性を持ち込んだ点です。“ライブ性を持ち込む”ために具体的には、作者が制作している様子をビデオに撮ってもらい、集まった映像を繋げて展示会場で見てもらえるようにしました。

さて、ここで作品と作者の関わりに注目してみましょう。作品と作者は結びつけて見るべきでしょうか、それとも切り離して見るべきでしょうか。前者では作者優位となって“共同体”らしさがより強まり、後者では作品優位となって“市場”らしさがより強まるでしょう。

この展示会場では“共同体”と“市場”の両方が共存しています。このバランスの取り具合はなかなか難しいところですが、どちらか一方に振り切ってしまうのではなく、その中間領域のあり方を社会全体で丁寧に探り続けることが肝要なのだと思います。

「がばいアーティストたち」展 アドバイザー 花田伸一





参加者アンケートから

・いつも来ているゆめタウンにアートがあるといつもの雰囲気と少しかわってすてきな空間だなと感じます!ポストカードのところに、iPadで作者の方が実際に絵を描いているところが動画で流れる映像がいいなと思いました!書いている様子がうかがえて、とても良かったです!もっと、大きなスクリーンで見たいと思いました!

・人間1~99%のみんな障がい者です。各々の良い所をのばしていく。自助具が未完成なだけです。メガネも自助具です。私もこの世にメガネがなかったら、まったくぼやけた世界しか見えません。未来に向かってゆっくり進みましょう。

・とても素敵な取り組みだと思います。とても癒されました。Fucoさんのモクモクと描く丸 小さな丸が世の中どんどんつながり大きな輪になり、障がい者の理解につながるよう期待しています。ありがとうございました。

・自分で書いた絵のTシャツを着て街を歩くのとてもステキだと思います。うちの娘も障害者ですが色々作れる日が来ればなと思います。

・いろんな場で、たくさんの出会いがあるのがうれしいです。もっと多くの人とのかかわりを♡

・私自身も描く事が好きで、色んな文字・数字・絵を日頃描いています。障害の有無ではなく、1人の人間、動物が描くモノがとてもスキです。すばらしい作品ばかりでした。感謝です♡

・去年も1枚自分用にTシャツを購入しました。友達の作品もあってとても素敵でした。2年連続で展示会があって嬉しいです。また、来年もしてほしいです。

・お金を払って買うかと言われれば買わないかなあ。すこし残念だと思う。この展示会は、障がいの人がかいたの? だったらもっとアピールすべき!!





・見ていてとっても楽しい気持ちになるＴシャツの絵（デザイン）でした!! 素敵すぎます!!

・誰もが表現する事のたのしさ、すばらしさ、自由さ、色々もっているんだなあとあらためて思いました。子供たちがＴシャツに向かう姿に私も何か表現をまたやってみようかなと思いました。

・それぞれの作品ごとの個性が光っているようで、見るだけで楽しい気持ちになった。その自由さは、Ｔシャツならではのように思えた。

・大好きな作家さんの作品が全てポストカードになっていなかったのが残念でしたが、非常にすてきな時間を過ごせました。ありがとうございました。

・健常者ではできない素直な気持ちを絵に表現できるのはすばらしい事だと思います。前回も観に来ましたが、今回も感動しました。もっと、障がいを持っている方達をよく知り、理解しあえるようになればいいなと思います。Vol.3を楽しみにしています。

・感動しました。応援しています。無理をしないぐらいで頑張ってください。頑張りすぎないでください。

店に売ってあるＴシャツよりデザイン性があり、着てみたいと思う。ネット販売等していただきたいです。

・一人一人の個性を受け入れて、付き合うことができれば、お互い幸せな気持ちになると思います。

・今後ぜひ息子（自閉症）に自由に描かせてみたいです。

【日時】令和2年2月16日(日)ー 19日(水) 【会場】ゆめタウン佐賀 1階セントラルコート

【出展作家】30名 【展示数】55点 【来場者】約95,000名（※会期中のゆめタウン佐賀 来場者数）





日常生活の中で、どんな地味なことでも魅力に変える 身体表現ワークショップ

絵を描いたりモノを作ったり、いわゆる「アート」なことはやってないけど、
この人の魅力をもっと輝かせたい！
既存の価値観に当てはまらなくても、それは立派な“表現”です。

相手のなにげない姿や動きを、いつもより少し集中して観察してみましょう。
身体を使いたいくつかの簡単なレクリエーションを通して、一人ひとりの表現を見つめ、
魅力に変えていくための視点を学びます。
県内の3つの地域（小城・鹿島・唐津）で開催し、
障がいのある方、福祉の支援者、関心のある方、大学生など、
あわせて70名の参加者がワークショップを通して
身体表現の面白さに触れました。

〈小城会場〉【日時】令和1年8月25日（日） 【会場】ゆめぶらっと小城 【参加者】24名
〈鹿島会場〉【日時】令和1年10月13日（土） 【会場】鹿島市生涯学習センター・エイブル 【参加者】26名
〈唐津会場〉【日時】令和1年11月30日（日） 【会場】相知交流文化センター 【参加者】20名
【講師】小松原修 氏（ドラマディレクター／うれしの特別支援学校）

身体表現ワークショップを振り返って

今年度は、佐賀地区（小城）、鹿島、唐津の3カ所で開催し、県内に潜在するスター（障害者を主として）を発掘し、さらに、その視点を持って支援してもらう人材を増やすことを目指してワークショップを行いました。

障害者の身体表現活動は、アールブリュットであったり商品デザインであったりとビジネスと直結する美術などのビジュアルアートに比べると、ビジネスとつながることは難しく、どちらかというと余暇支援になることが多くなるため、福祉事業所で強く求められている就労の幅を広げるツールにはつながりにくいので、取り入れられることには抵抗があるように感じます。

そこで、発想を変えて、身体表現を、障害者一人一人の魅力を見つけて発信する、そんな魅力のある人がその事業所にいる、一度会ってみたい、話してみたい、そのための手段にしてはと考えました。

東京ディズニーランドでは、スタッフを“キャスト”と呼び、外に向けて“キャスト”をPRしています。事業所における“キャスト”とは、スタッフも利用者もだと思っています。その“キャスト”をPRすべく、魅力を見つけるためには、その人のことをよく見る、その人の声をよく聞くことが大切です。

今回のワークショップでは自分以外の参加者の、声を聴き、行動・動作を見て、真似ることを中心に取り組みました。形だけではなく、佇まいや雰囲気も含めて真似る。どんなに地味なことでも魅力にしていけることを目的としたワークショップでは、身体表現とは、踊れたり演じられたりすることは求めませんでした。

歩く、声を出す、居る、それができれば十分魅力につながっていく、その視点をこのワークショップでは学びました。そしてこの学びが、「スター発掘プロジェクト」（→ P22）につながっていったのでした。

講師 小松原 修



参加者アンケートから

・人に関心を持って接することの大切さと、別視点を持つことの楽しさを学びました。

・日常的に目立つ方に、つい視線が向きがちですが、そうでない方へも関心を持つことが大事と思いました。

・身体表現自体あまり自覚していなかったけど、今日のワークを通して、いいなあと感じた。これから日々の動作に興味を持っていきたい。

・楽しかったです。“場”を共有する楽しさ感じました。

・“見る”“表現する”というところが、療育的な所もあると感じました。→人を意識する、人の動きから考える、人の立場に立つなど。

・何気なく行っている呼吸やまばたきも「意志がある」と思って観察すると可能性が発見できるような。支援者としての視点を持続けたいと改めて感じた。

・多面的な取り組みであり、おもしろいと思います。増々、こういう場が多くあるといいなあ～と思います。



第3回

スター発掘プロジェクト in 佐賀

歌う! 踊る! 奏でる! 演じる!

パフォーマーと観客が一体となって表現を楽しむ、自由で広々としたステージ。

障がいがあってもなくても、人前でパフォーマンスして楽しませたい人、大集合!

あわせて58名が集まり、多種多様なパフォーマンスを楽しみました。

得意な“表現”
自慢の“何か”を
思いっきり披露して
みませんか?

誰にも負けない! と
勝手に思ってることで
ライブしてみませんか?

1ステージ
5~10分程!
あなただけの
お時間です!

ジャンルに
当てはまらなくても
OK!







スター発掘プロジェクトを振り返って

新型コロナウイルスによる感染のリスクが高まってきた2月下旬の開催で、実際に開催できたことは本当に嬉しかったし、安心しました。今年で3回目。出演者・団体の数としても昨年度を大きく上回っただけでなく、障害有り無し半々、年齢も11歳から62歳と幅広く参加していただきました。ステージ演目も、ダンスや楽器演奏、音楽と空手をミックスしたパフォーマンスやアカペラ演劇、高校生たちによる即興演劇とこちらも多種多様でした。出演していただいた方の半数以上が、身体表現ワークショップの参加者でした。ワークショップで、魅力を見つける視点を身につけて、自分たちの周りにいる表現者を見出してきた流れが活かされました。

今回は、それぞれの演目にコメントをつける評論者を願いました。音楽家や学芸員やデザイナー、弁護

士もそのコメンテーターになっていただき、それぞれの視点で斬新な評論をしていただきました。上手下手ではなく、どこにインパクトがあったか、自分の専門の視点から見るとこんな発見があったといった、ポジティブで多面的な評論をしていただくことで、観客と出演者が有機的につながったと思います。このプロジェクトは、始める前から「のど自慢の予選会」をイメージして企画してきました。

今回は、実に企画した時のイメージに近かったと感じています。本事業のアンケートに、「お気に入りの作家、作品はありますか」という問いがあり、美術などの部門ではかなり「ある」との回答が多くなってきました。ここが、身体表現を含めたパフォーマンス部門の大きな課題だと思っています。いわゆる「推し」が生まれてくるような取り組みを今後企画していきたいと思います。

講師 小松原 修





📝 参加者アンケートから

- ・一人一人にスポットが当たり、客席もあたたかくて感動いっぱいでした。障害のある人もない人も一緒に楽しめるステージをこれからつくっていきたいです。今回は、本当に勉強になりました。ありがとうございました。
- ・たくさんの方と出会えて良かったです。楽しめた!
- ・様々な方々のパフォーマンスを見させていただき、とてもいい刺激をもらいました。
- ・かなり気分が落ち込んでいたのですが、楽しくなり帰りはずいぶん軽くなりました。
- ・表現は自由でいいんだと思いました。今日は楽しかったです。
- ・他の人の前で、うたうことをあまりしたことがなく、うまくうたえなかったこともありましたが、楽しくうたえたのでよかったです。
- ・表現方法はいろいろだな～と思いました。
- ・また次のスター発掘プロジェクトに参加してみたいと思いました。
- ・PA がなくて「歌ってみた」の方の歌唱がきこえづらいのが残念でした。音響はしっかりされた方がイイと思います。
- ・勇気がついた。
- ・もっと出たくなった
- ・このイベントをいつまでも!

【日時】令和2年2月23日(日) 【会場】メートプラザ佐賀(佐賀市) 【参加者】出演:14組(23名)／総来場者:58名
【講師】小松原修氏(ドラマディレクター／うれしの特別支援学校)





障がいのある方の作品の魅力を伝えるための ブランディング・ワークショップ（入門編）

デザイナーが通常のクライアントとの仕事で行うような、ブランディングの過程を、ワークショップ形式で学びながら、参加者それぞれのブランドイメージを作り上げていきます。

“今ここにあるのに、お客様に伝えきれていない魅力や価値を見つめ直し、
伝えやすくすること＝「ブランディング」”

「何のために」「誰のために」「誰に向けて」障がいのある方の作品の魅力を届けたいですか？

その「目的」や「大切な想い」を明らかにすることからブランディングは始まります。

「核となる想い」を言葉にし、強みを客観視することから、コンセプトを明確にしていきましょう。

障がいのある方の作品を活かして何かを作りたい、何かを企画したいと考えている事業所等を対象に、
ワークショップを通して形になったコンセプトや考え方を持ち帰っていただいて、
実際の取り組みに活かしていただくことを目指しました。

〈鹿島会場〉【日時】令和1年10月13日（土） 【会場】鹿島市生涯学習センター・エイブル 【参加者】18名

〈唐津会場〉【日時】令和1年11月30日（日） 【会場】相知交流文化センター 【参加者】22名

【講師】伊藤友紀氏（よりそいデザイナー／HONOTA design 主宰）



ブランディング・ワークショップを振り返って

昨年は少数の事業者さんのアートのグッズ化をデザイナーとしてサポートさせていただきました。その支援の終了後、商品化するということは届ける相手、買ってもらいたいお客様に「選んでもらう」ことが必要で、そのためにはただただおしゃれなグッズを作るのではない、コンセプトや、その人らしさを明確にした「ブランディング」が必要だ、という気づき生まれ、SANCの担当の方とも共有できました。

そこで2019年は、ブランディングの基本的な考え方やプロセスを、広く知ってもらおう、ということを目指し、ブランディング入門編のワークショップをさせていただくことになりました。

今回難しかったのは、様々な立場・ステージ（アートを実際に商品化しているか、など）の方がいらっしやるので、それによってブランディングの必要になる知識の深さも全く違う、というところでした。

2回の講座を担当させていただき、共通の流れとして、ブランディングの基本的考え方の座学→事例の紹介→グループになって1つ作品を決めプロセスの一部を試す→形にして発表する、という内容で組みました。

結果として、一番盛り上がったのは、グループワークで、テーブルの中でお一人の作品を決め、みんなで外部の目線だからこその「強み」や「本質の魅力」を

出し合って言葉にしてもらい、最後は簡単なキャッチコピーをのせたポスターを作ってもらいました。

この、「外部の目線」というのがブランディングにはとても大事で、自分だけではどうしても、本質の魅力をすくい取ることが難しいもの。

今回、参加していただいた方にはみんなでワイワイ「よいところを見つけて褒める」ことによって、ブランディングのプロセスの中の一つ大事な部分を感じてもらえたかなと思っています。

ブランディングとは、人によって様々な考え方がありますが、私個人がざっくりひとことで言ってしまうと「他と違ういいところを探し、そこに焦点をあてて明確にし、形のデザインに落とし込んで伝え続ける。」ということだと思います。世界観をわかりやすく伝えるには、言葉に落とし込み、デザインに反映することが必要になります。

「これをやれば正解」というものはなく、一人ひとりが考え、外部の力も借りて、育てていく…とても難しそうに感じますが、実はとてもおもしろく、成功すれば作っている自分たちも、届け先のお客様も、どちらも幸せになれるものだと思います。

これから作品を世に広める時の何かのきっかけになれば…、そんな思いを込めて、これからも皆さんの活動を応援したいです。

講師 伊藤 友紀



障がいのある方の創作活動にまつわる

権利擁護「所有権・著作権」 “ガイドラインに沿って作品規定を作ろう”

障がいのある作家の権利を護りながら、安心して作品を取り扱うために必要なこと。
所有権・著作権・成年後見制度など、創作活動にまつわる権利擁護を学びます。

障がいのある方たちの作品を展示・販売したいとき、グッズ化したいとき。表現を発信していく過程で、創作活動にまつわる作者の権利をどのように考え、護っていけばよいでしょうか。

「事業所で作った作品はだれのもの?」「作品の売り上げはどう分ける?」「どんな手続きが必要なの?」障がいのある方の作品を取り扱う際に生じやすい事例を用いた解説や、著作権等保護ガイドラインに沿った「作品取扱規定」の作成を通して、作家の権利を護りながら安心して作品を取り扱うために必要なことを学びました。

権利擁護セミナーを振り返って

この研修は、障がいのある方が作品を創作した場合、どのような権利が生まれるのか、その権利を保護するにはどうすればよいかという問題を、作品規程を作りながら学ぶというものです。これまでも研修は複数回実施しておりますが、今回は、事前に参加者の方の属性が分かっておりましたので、参加者のそれぞれの立場に立った説明を行うように心がけました。また、事前に質問をいただいておりますので、その質問に答える形で話をさせていただきました。

研修後の参加者の方のアンケートを拝見すると、作品のデジタル化にも興味を持たれていました。今後、発表の場がインターネット上に広がっていくことが十分考えられるので、デジタル配信の際の権利擁護についても作品に携わる人が学んでおく必要性があります。機会があればこのようなお話もできたらと考えております。

講師 安永 恵子



アトリエ・サンク

障がいのある方が、気軽に芸術活動を行える拠点として、芸術活動の支援・普及のネットワークを築く拠点としてのアトリエ・サンク。

アトリエ・サンクは、自宅や事業所等でなかなか芸術活動を行えない方や、普段のライフサイクルで芸術活動がむずかしい方、汚れる心配をせずに思いっきり絵の具で描きたい方などが、気軽に立ち寄れて、安心して芸術活動に取り組んで頂くためのスペースです。

障がいの有る無しに関わらず、気兼ねなく集い自由に創作活動ができる場として、月1回のアトリエ・フリーオープン日「ゆつつらアートデイ」(14回開催、117名参加)を開催。絵の具(水彩・アクリル)、色鉛筆、クレヨン、毛筆、粘土、など各種画材の貸し出しも行なっています。

親子で創作に取り組まれたり、保護者さん同士のほっと一息の場としてもご利用いただきました。

また、お気に入りの画材を持参して作品展へ出品するためにアトリエに通う方、他県から障がい特性に合わせて落ち着いた環境を求めて来られる方、いつもとは違う環境で創作してみたいという方など利用のバリエーションも多岐に渡りました。



【ゆつつらアートデイ】開催: 14回 / 利用: 117名



佐賀県との連携

「佐賀さいこうアートプロジェクト2019」、「障がい者文化芸術作品展」等、佐賀県と協力しながら、障がいのある方の芸術活動の普及支援を進めていきました。

「佐賀さいこうフェス2019」 佐賀さいこうフェス2019のワークショップブースに出展し、前年度開催した展覧会「がばいアーティストたち」の巡回版として、障がいのある方の絵をプリントした T シャツの展示を行いました。同会場に「出張版ゆっつらアートデイ」として、誰でも自由に絵を描けるスペースを設置。会場では、障がいのある方と一般の方が、絵を描く活動を通して自然に空間と時間を共有する風景が見られました。

展覧会「第19回障がい者文化芸術作品展」 県が主催する「第19回障がい者文化芸術作品展」のチラシの表紙デザインに起用する作家と作品の推薦や、特設コーナーの作品選出、会場設営に協力しました。会場では、SANC が開催するイベントのチラシを配布していただきました。

広報協力 広報誌への掲載、「がばいアーティストたち」CM 製作& TV 放送 佐賀県の広報紙「県民だより」にて SANC の事業紹介記事を掲載していただきました。展覧会「がばいアーティストたち vol.2」では、佐賀県文化課とサガテレビの協力により、TV での CM 放送が実現しました。

第19回障がい者文化芸術作品展 【日時】令和1年12月14日(土)～12月22日(日) 【会場】佐賀県立博物館

佐賀さいこうフェス2019 【日時】令和1年10月19日(土)～20日(日) 【会場】岡田三郎助アトリエ 女子洋画研究所 【来場数】864名



大学との連携

「障害者とアート」をテーマにした大学の授業に協力。

展覧会実行委員会やゆっつらアートデイへの参加を通して、新しいつながりが生まれました。

佐賀大学芸術地域デザイン学部の3年生に向けて通年で開講される「地域創生フィールドワーク」の「障害者とアート」をテーマとした授業にSANCが参加しました。

SANCは、障がいのある方と学生の交流・共同制作の場としてのアトリエの提供、県内外でアート活動を行う事業所の紹介、企画に関するアドバイス等を行い、様々な人たちが芸術活動を通して関係を持つことによる、障がいのある方の芸術活動の裾野の広がりを目指しました。

受講した学生は、アトリエ・サックでの紙とペンによる共同制作を中心に、SANCの研修プログラムへの参加や自主企画のワークショップ開催、県内外の事業所見学などを通して、さまざまな形で障がいのある方やそのご家族・支援者とも交流し、障がいのある方の芸術活動について理解を深めていきました。

また、こうした関わりや文献調査などを通して感じたことや気になったことを共有し、それをもとに各自の成果物を作成。佐賀市内で自主的に成果発表展を開催し、1年を通して学んだことを一般に向けて公開しました。

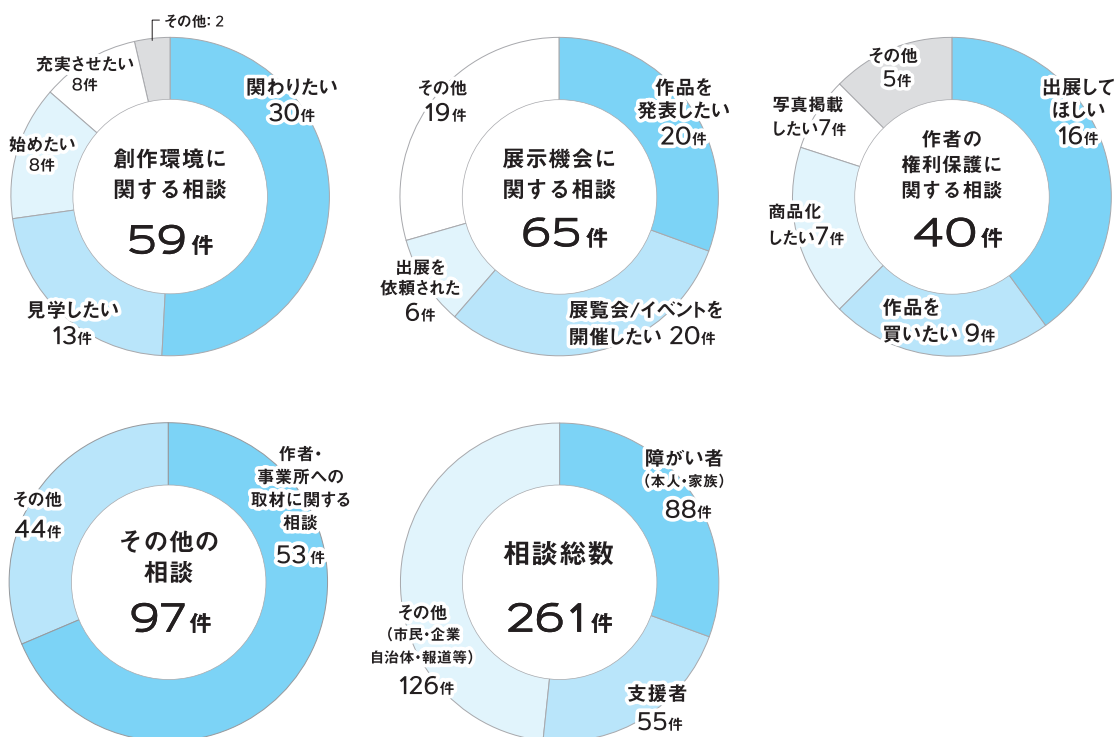


学生が制作した「ゆっつらアートデイ」を紹介するリーフレット

相談支援

障がいのある作家についての問い合わせが増えています。

そういった中で一般の方とのかかわりを通して、作家の自主的な発表活動が活発になり、展示方法や発表方法など、具体的な内容の相談も多くなっています。



【相談例】

創作環境に関する相談

- ・アート活動に取り組める事業所を教えてください。
- ・事業所で行っているアート活動について、アドバイスをもらいたい。
- ・アトリエでワークショップを開催したい。

展示機会に関する相談

- ・公募展に出品したいので、自分に合った公募展を調べてほしい。
- ・展覧会を開催するので、作家を紹介してほしい。

作者の権利保護に関する相談

- ・自分の描いた絵を売りたいが、なにからすればいいかわからない。
- ・事業所でブランドをつくって工賃につなげたい。

その他の相談

- ・障害者の芸術活動と伝統工芸を結びつけた取り組みがないかを探している。
- ・授業の成果発表の会場としてアトリエを使いたい。
- ・作家取材したい。

芸術活動についてのアンケート

佐賀県内の福祉事業所、特別支援学校、病院等を対象に

「障がい者支援事業所等における芸術活動についてのアンケート」を実施しました。

設問「芸術活動において、現在の課題や必要としていること」への回答をグラフ化

(■ 芸術活動に興味はあるが芸術活動を行っていない施設 ■ 芸術活動を行なっている施設)

実施年度 現在の課題	平成29年度 (対象:473/回答:172)	令和元年度(美術) (対象:478/回答:112)	令和元年度(舞台) (対象:478/回答:112)
指導者の確保	71% 49%	86% 47%	69% 56%
活動場所の確保	40% 24%	36% 12%	33% 15%
活動時間の確保	62% 34%	44% 33%	49% 34%
活動資金の調達	28% 13%	25% 23%	24% 17%
指導支援の方法	46% 54%	56% 37%	44% 24%
支援者同士の情報交換	7% 16%	8% 21%	16% 15%
展覧会等の開催方法	1% 21%	8% 9%	20% 10%
作品や作者の権利擁護	4% 6%	8% 14%	11% 0%
商品化の方法	26% 26%	19% 23%	2% 0%

平成27年度、平成29年度に佐賀県が実施した「障がい者支援事業所等における芸術活動についてのアンケート」を、今年度はSANCが調査主体となり、佐賀県文化課・障害福祉課の協力を受けて実施しました。

福祉事業所、特別支援学校、病院など478箇所に送付し、112施設から回答をいただくことができました。

今年度からアンケートの内容を造形活動と舞台芸術活動に分けたことによる設問の増加や、調査主体が佐賀県からSANCに変わったことによる影響のため

か、回答数は前回を下回っていますが、県内の障がいのある方の芸術活動に関して、より詳細なデータを収集することができました。芸術活動に関心のある事業所は81%→87%、実際に取り組んでいる事業所は51%→57%と増加しています。設問「芸術活動において、現在の課題や必要としていること」では、美術系・舞台芸術系ともに「指導者の確保」「指導支援の方法」「時間の確保」が課題の上位として上がっています。

Chapter 3

今年度の評価

アウトプット数値

研修等プログラム参加者アンケート

協力委員会による評価コメント

成果と課題



Kimitoshi Katsuki

社会や文化を作っていく事業の一端を担う、長期的な視点を意識しつつ、
目の前の課題を一つずつ解決し、実践を積み重ねていきます。
社会的インパクト評価に基づいて事業計画を立てて2年目となり、
前年度のデータから比較検証して評価を行います。

評価材料	・事業報告 ・アウトプット数値 ・参加者アンケート ・参加者アンケート自由記述
評価者	協力委員会

アウトプット数値

	項目	数値
障がい者	・出展者(展覧会)	30名
	・出演者(パフォーマンス)	11名(9組)
	・会場数	3会場
	・相談数	80件
	・相談の種類(上位5件)	①表現を発表したい ②イベントを開催したい ③創作環境に関わりたい ④創作環境を充実させたい ⑤商品化したい
	・発掘された作家の数	32名(美術25名、舞台芸術7名)
支援者	・出展をサポートした支援者数	21名
	・会場数	2会場
	・相談数	55件
	・相談の種類(上位5件)	①出展・出演 その他 ②作品を買いたい ③創作環境を見学したい ④創作活動を始めたい ⑤出展・出演を依頼された
	・研修の参加者数	203名
その他一般	・来場者数	95,900人 ※ゆめタウン佐賀来館者数95,000人を含む
	・会場数	2会場
	・出演者(パフォーマンス)	5組(8名)
	・相談数	125件
	・相談の種類(上位5件)	①作者、事業所を取材したい ②創作に関わりたい ③展示機会 その他 ④展覧会を開催したい ⑤創作を見学したい

展覧会での売上 (販売期間: 2/16~2/19)	購入者数: 119人(延べ人数) 売上個数: 354点 売上総額: ¥393,000
------------------------------	--

研修等プログラム参加者アンケート アンケート回答の平均値を色分け

令和1年度の研修・発表機会において、社会的インパクト評価（→ P6）の項目に基づいた5段階評価のアンケートを実施。3.50を中間値（白色）として、それよりも高い点数は赤、低い点数は青で色分けしている。

			セミナー	展覧会実行委員会
			R1.8.25	R1.7.26
障がい者	環境	No. 3	創作ができる場所が増えているか	3.90 3.88
		No. 4	作品を発表する機会が増えているか	3.81 3.88
		No. 5	アート活動に理解のある支援者が増えているか	3.60 3.76
		No. 6	アート活動を通して表情が良くなっているか	3.90 4.24
	普及	No. 7	アート活動の選択肢があるか	3.55 3.72
		No. 8	グッズ化の機会が増えたか	
		No. 9	展覧会に出展する機会が増えたか	3.68
		No. 10	一般の方の認知を得ることができているか	3.45 3.40
		No. 11	アート活動を通して自信を持つことができたか	4.21 4.20
支援者	環境	No. 12	障がい者のアート活動に関する知識が広がっているか	3.25 3.76
		No. 13	障がい者の権利擁護に関する知識が広がっているか	3.16
		No. 14	障がい者のアート活動に関するネットワークが広がっているか	3.55 3.79
		No. 15	障がい者のアート活動を通して抱える問題が見えているか	3.50 3.20
		No. 16	障がい者とのコミュニケーション力が向上しているか	3.55 3.72
		No. 17	“表現”を楽しめる支援者が増えているか	3.75 3.80
		No. 18	障がい者のアート活動を通して、価値観に変化が現れているか	3.70 3.76
	普及	No. 19	発信するスキルが身についているか	3.40
		No. 20	グッズ化の支援スキルが身についているか	
		No. 21	展覧会の開催スキルが身についているか	3.36
		No. 22	パフォーマンスの支援スキルが身についているか	
		No. 23	障がい者への支援スキルが向上しているか	3.35 3.44
		No. 24	障がい者の権利を守るスキルが身についているか	
		No. 25	問題の解決および実践ができているか	3.00 3.20
		No. 26	地域で活動している団体や事業所と連携ができているか	3.25 3.72
		No. 27	発信力の高い支援者が増えているか	
その他一般	環境	No. 28	障がい者とのアートを楽しむことができているか	4.06
		No. 29	会場へ足を運んでいるか	3.89
		No. 30	障がい者のアート活動を通して、価値観に変化が現れているか	3.72
	普及	No. 31	お気に入りの作品や作者ができているか	3.44
		No. 32	グッズ化された商品を購入しているか	3.78
		No. 33	展覧会に足を運ぶ機会が増えているか	3.56
		No. 34	障がい者のアート活動を通して、障害への理解が進んでいるか	3.72

5段階評価のアンケートを各回に実施

(5:よく感じる／4:まあまあ感じる／3:どちらでもない／2:あまり感じない／1:感じない)

展覧会実行委員会			身体表現WS			ブランディングWS		権利擁護	展覧会	スター発掘
R110.4	R111.5	R2.110	R1.8.25	R110.13	R111.30	R110.13	R111.30	R2.117	R2.2.16-19	R2.2.23
3.86	4.00	3.85	3.67	3.43	3.47			3.77		4.00
3.95	3.67	3.92	3.67	3.29	3.47	4.25	3.80	3.77		3.75
3.67	3.75	3.69	3.50	3.75	3.67	4.25	4.00	3.69		4.18
3.76	3.92	3.85	4.33	4.33	4.27	4.25	4.00	4.31		4.00
3.62	3.58	3.31	3.50	3.58	3.53	4.13	3.80	3.69		3.73
						4.25	4.00	3.85		
3.76	3.67	3.77								
3.45	3.33	3.15	3.50	3.07	3.20	3.75	3.60	3.33		3.45
3.90	3.92	4.00	4.08	4.08	3.93	4.00	4	4.15		4.27
3.65	3.50	3.64	3.08	3.37	3.53	3.82	3.80	3.64	4.64	4.11
3.35	3.42	3.36						3.43		
3.95	3.67	3.57	3.62	3.74	3.47	4.00	4.00	3.64		4.33
3.27	3.46	3.36	3.00	3.58	3.41	3.82	3.80	3.57		3.78
3.50	3.77	3.46	4.00	3.89	3.75	4.00	3.60	3.86		4.00
3.83	3.54	3.69	3.54	3.42	3.59	4.00	3.60	3.93		4.22
3.77	3.69	3.46	3.69	3.58	3.69	4.10	3.60	3.64	4.54	4.13
3.45	3.38	3.46				3.36	3.80	3.43		4.00
						3.18	3.80			
3.41	3.38	3.77								4.22
			2.85	3.00	3.19					3.67
3.50	3.38	3.54				3.36	3.60	3.36		
								3.57		
3.36	3.25	3.31	3.00	3.00	3.19	3.09	3.80	3.43		3.89
3.36	3.15	3.62	3.08	2.72	3.13	3.09	3.80	3.43		4.11
									4.87	4.50
										4.00
									4.46	4.30
									4.73	3.80
										4.20
									4.65	3.90

協力委員会による評価コメント

佐賀県において障がいと芸術文化に関わる各分野の方々（行政、弁護士、学芸員、大学教授、特別支援学校教員、報道機関、福祉事業者、デザイナー等）による協力委員会を設置し、1年を通じて広報への協力や、事業への助言・評価を得た。

【評価：発表機会】

展覧会「がばいアーティストたち」

嶋立久人氏 今年は2回目ということで、昨年製作した什器をもとにサングが熟考を重ねて、そのあと私が注文を受けて～という流れだったので、よりやりたいことが考えられて、やりやすくなったのではないかと。昨年に引き続き、コンセプトに合わせ段ボールという素材、主張性のない素材を使って什器を作るということをした。また、解体後も他の場所や別の機会に活用できるように、それなりの強度のあるものを作った。

そういう風に、アーティストの活動を支援する道具を注入したつもり。来場者からのフィードバックや利用した方からのフィードバックをもとに、より有効に活用できるようなものにアップデートしていければ、と思う。

江島真衣氏 会場がゆめタウン（大型ショッピングモール）ということですから行きやすかったし、子供たちがお絵描きスペースで描いたりしている間に自分もゆっくり見れてとてもよかった。来場者の方を見ていると、ショッピングカートをはきながらふと立ち止まってご夫婦でお話をされていたり、すごくいいなあと思いながら見ていた。驚いたのが、普通に見られてる方がふらふらと机に座り、いきなり描きだして「あ、この方作家さんだ」と、気づいたらいきなりワークショップ的なものが始まっていて、作品が次々と貼られていくのが面白かった。

パフォーマンスイベント「スター発掘プロジェクト」

小松原修氏 今年度14組が出演された中で、障がいのある人もない人もいて、最高齢の62歳の方はアカベラ演劇で一人ハムレットをしたり、出演者の層としてもいろいろなカテゴリの方がいて、理想的なものになった。

今回、メートプラザ佐賀を会場にして、ちょっと広いかなと思っていたら、逆に、ちゃんとした舞台と照明があって、観客の座席も全部出してもらって、そんなに人数は多くなかったけど、劇場という感じがすごくよかった。これまでの2回はバルーンミュージアムの部屋を使っていたが、やはり、ステージと客席がしっかりあって～という状況が、パフォーマンスにすごくしっくりきた。

今回のスター発掘は、コメンテーターも大きな挑戦の一つだった。5名のコメンテーターがいて、一つのパフォーマンスが終わったら、5人全員がコメントをしていくというもの。決して「上手い・下手」という表現ではなく、違った切り口でそれぞれに話をしていくという感じだった。本当に多種多様な言葉が飛び交って、それがすごくパフォーマンスした方にも励みになったみたいで、また出たいとか、また来年もよろしくお願いしますと言ってもらえたのが、すごくよかったと思う。

パフォーマンスをした方もよかったし、見た方もよかったし、もしかしたら、コメントをした方もよかったと言ってくださるんじゃないか、と期待している。

秋山沙也子氏 私の普段の仕事は、モノを相手にするというか、作品を相手にする仕事で、こういったパフォーマンスには仕事でもかかわったことがなかったので、大丈夫かなあ、務まるかなあ、と思いながら参加した。けれど、最初のウォーミングアップで小松原さんが先導してラジオ体操をみんなでやった時から、すでにとても良い雰囲気だった。パフォーマンスも多種多様だったけど、やっぱり客席も他の出演者の方も全体で応援しようという、一人一人に対する会場のあたたかい雰囲気がすごく印象的だった。障がいのある／なしや経験の浅い／深いに関わらず、みんなで後押しするような雰囲気がすごくよかったなあと思う。

私個人としても、予備知識がなかったため、皆さんの好きという気持ちが爆発したステージを純粋に楽しむことができ、本当にいい時間だった。自分のコメントが、表現をする方にとって、少しでも励みになったり、後押しをすることができたのなら、これ以上ないことだと思う。

安永恵子氏 今回、門外漢ながら、初めてコメンテーターという役目をさせていただいて、どういったコメントをしようかと思っていたが、本当に純粋に楽しませていただいた。最初、小松原さんから「法律家からするとどうなんだというのをコメントしてみてください」と言われ、それには答えることができなかった。後で思ったのは、自己実現ということについて。憲法では「表現の自由」が保障されていて、最小限のことしか制約してはいけないことになっている。（スター発掘のパフォーマンスを見て、）表現するということは本当に本能なんだなあと感じた。様々なバックグラウンドを持った方が「表現をしたい」という同じ欲求を持ってこのステージに立っていることに崇高さを感じた。

一人一人が舞台上で表現したいことをしっかりやっており、楽しませていただいたし、見せてくれてありがとうという、そういうステージだった。

嶋立久人氏 今回、企画段階で一度打ち合わせをさせていただき、ここにいる私も含めた4人ともう一人、池田隆臣さん（ミュージシャン）という外部の人間を一人入れてみませんかと提案させていただいた。

個人的には、サンクの事業のなかで、小松原さんが事業の舵取りとして入られている中に、委員会の我々が参加させていただいたり、池田さんのように外の人間が入っていったりすることで、協力の輪がゆるやかに広がっていく、というのがよかったんじゃないかと思った。出演者の方も、そのなかで感化されたりしたところもあったんじゃないかと。僕もできるだけ出演者の予定調和、「こういう風なことをやろう」と意気込んできたところをどうやって乗り越えてやろうか、不協和音みたいなものを載せてやろうかと思って頑張っていたが、そこに乗かって、また秋山さんや小松原さんにコメントいただいたり、そういうセッションみたいなものが全体の雰囲気を作っていたことが面白かった。

【総評】

秋山沙也子氏 佐賀県立美術館として協力委員会に参加させてもらっており、今年は個人的にスター発掘にもコメンテーターとしてお招きいただく機会もあり、ちょっと門外漢だなと思っているところでも、足を踏み入してみると自分自身の視野が開けたり、素晴らしい発見があったりして嬉しかった。はるさんのされている取り組みは、「場」を作ることを大事にされているのかな、ということ、その時にすごく感じた。

アトリエオープンも、舞台系のワークショップも。障がいのない普通の人でも、なかなかそういうものをオープンにする場所ってないし、障がいのある方だとなおさら…というのはあるのかなと。そういう方々のために、場所を作るということが一つ活動の柱になっているのかなと、

なんとなく思いました。それはすごくささやかなことだと思うし、派手な成果とか分かりやすくりターンがあるわけではないけど、文化とか芸術と一緒に、社会や当事者の方にとっては必要不可欠というか、重いものなのではないかなと思った。そういう場って当たり前にあるように、続けていくことがすごく難しかったり、なくなる時にはあっさりなくなっちゃったり、今回の、文化芸術に対する自粛要請ムードにしても、本当に弱い立場にあるようなものでもあるとは思いますが、やっぱりなくなってほしくない。それを存在意義にしている人がいるんじゃないかと思う。

スター発掘もアトリエもそうだけど、障がいのある方もない方も、そこで出会う場が一つあるということが、素晴らしいんじゃないかなと思った。そうすることで一般の人もそういうものを身近に感じたり、あるいは社会からあまり見えない存在である障がいのある方を意識するというだけでも違うと思う。そういう場があり続ける、提供し続けていることは素晴らしいことで、これからも続いてほしいし、私個人としてもそう願っている。

栗山裕至氏（「ゆつつらアートデイ」について）

従来から協力委員として関わらせていただきながら、大学の教員養成系にいて、学生を巻き込んでいくことがなかなか実際に形にできず、申し訳なく思っていた。しかし今回、芸術地域デザイン学部の柳先生や花田先生のおかげで、学生さんが積極的に自分で参加して、あるいは自分で企画をやって、というような形が生まれてきたのは嬉しいと思う。

例えばこの（障がいのある作家と学生が）向かい合って制作している写真。芸術系の学生というのは、普段は専門的な表現について学んでいる。そうすると絵を描くというときに、油絵具で描かなくちゃいけないとか、岩絵具を膠で溶いたものを繰り返し塗り重ねないと絵はできないものと、自分で自分を縛ってしまっているところ

ろがあって、実はマーカーペンなんて久しく手にしていない。だからこうして向かい合って描くこと自体が彼らにとっても非常に新鮮で、しかも見比べると明らかに向こうの（障がいのある）方の方がはるかにパワフルでガシガシ描けていて、「あ、私負けてるかも…」と内心ドキドキしているかもしれない。こういったような出会い、関わりが生まれる、そういうことが彼らにとってすごく大きいことだし、またそれを他の人に伝える、そういうことがいろいろな効果というか、新たな試みにつながっていくんじゃないかなと思う。

嶋立久人氏 がばい展パンフレット巻頭の「障がいのある人たちがもつ魅力をより広く届けたい!」というのがサンクの取り組みもうとしていることを言語化し、外に発信している部分なのかなと思っており、私はサンクがやっているものって、みんなが持っている魅力を、「それって魅力だよ」と気づかせ、整理してあげることで、そしてそれを社会や他者との接点やきっかけとして、練習なり実践なりができる「場」を作ってあげることでないかと思う。それを、私たちが現場に協力したりそこで他の人が来たりと、そういったことがゆるやかに進み出している。来年度、再来年度に向けて、サンクのこだわり、手法がより言語化され、それに共感者が増え、他県でも「サンクみたいなことがしたい」という声が増えていく。

近年、アートに取り組む事業者が県内に2つできたことは特にすごいことで、そういった事業所に情報を提供したり、経験を提供したりということをしていった上で、サンクがゆるやかな大きなパレットみたいなものを抱えているなかの、特に得意でこだわっている、絵の具のパレットのなかの仕切りみたいなものを器として見せていくの、かっていうところなのかなと、だんだんとそういう風に感じてきた。

僕は普段、事業者さんのデザインの技術支援者として支援させていただいているが、同じようにサンクのこと

も考えさせていただきながら、また来年もご尽力させていただければ。あと、がばい展の図録の文章はすごくよかった。日頃からの愛を感じるし、展覧会の図録という役割に対してもちろん解を出している感じがする。

角田隆浩氏 今年度、大学生を巻き込むことができたということがすごく大きいと思う。芸術地域デザイン学部の学生さんと一緒に活動ができたというのは、彼らにとってもなかなか障がい者さんと一緒に活動する機会がない中で、大きな人生の学びというか。10年後、20年後に振り返ったとき、ああ、障がい者さんと一緒にこんな活動したなあという思いが残るというのは、すごく理解や裾野が広がっていく活動だなと思う。それに、事業所に若い方が来るとなんとなく嬉しい。僕たちもうれしいし、利用者さんたちも、若い方が来ていろいろ教えてくれると、なんだかちょっと嬉しくなる。逆に利用者さんが教えたりすることもあると思うけど。そういう交流の機会が持っているのってすごいことだなあと思う。

（スター発掘プロジェクトで）AKB48を踊っていた子はうちの事業所をご利用の方で、昔からAKBが大好き。事業所に来たらまず着替えて、一曲踊る。私たちは花束つくって花吹雪を一回して、拍手をしてから、落ち着いたら活動に入る流れになっている。そういった、パフォーマンスをされる方一人一人がストーリーを抱えてやっておられるので、そういう背景まで紹介できるようなことまでできたら、見る側も気持ちが入ると思うし、面白い感じになるんじゃないかなと思う。

小松原修氏 （スター発掘プロジェクトについて）ようやく理想的なものができたかなと思っている。どうしても、ビジュアルアートというか、モノを描くとか作るとかに比べてパフォーマンスだとあまり仕事にもならず、いったい何の意味があるんだろうというところが、パフォーマンスをやっている人間のちょっとしたコンプレックスとしてあっ

た。そこで今回は「パフォーマンスじゃないとできないことは何なのか」というところを一つ示せたと思っている。

今年は良かったけど、じゃあこれからどうするか、というところで、アンケート表（→P36）の「お気に入りの作品や作者ができてるか」という項目。Tシャツ展では、独特のデザインとか、そういった商品を買われる方がいらっしゃるのかなあというところで、やっぱり濃い赤がついている。パフォーマンスも「好きなパフォーマーができた」「またこの人のをみたい」みたいな風になってくると、それがある意味スター発掘ということになるかな、と。

そうやって社会とつながっていくことが、僕としては一つの願いではある。ステージでつながっていくところから、さらに日常で会うという面白さもある。事業所に来てまず踊って、花束と拍手をもらってから活動に入るみたいな、そういう人ってもっとたくさんいると思う。そういう方をまた発掘して行って、こういう場の中でつながっていくというのもスター発掘になっていくのかなと思っている。

僕の一つの目標としては「お気に入りのパフォーマー」というのも、プロデュースの仕方で、ストーリーを伝えるパンフレットを作ったりとかも面白いかもしれない。そういうことにつながっていくともっと夢が広がっていくと思う。

橋口泰史氏 「がばいアーティストたち」の段ボールを見ていたら、もともと舞台で箱馬とかひな壇とか段ボールですることあるよなあ…こういう使い方もおもしろいなあと思った。

スター発掘プロジェクトは、新型コロナウイルス対策で普通の芸術活動が悉く中止だ延期だとなっていて、私もちょっとした音楽活動をやっているが、会場が使えず3月のライブが中止になったため、非常にストレスになっている。そんな中、ストレスを発散する場を準備するというのは、自分のためでもあるけど、本当にみんなのためになるんじゃないかなあと思う。こういう場に、もしかし

たら我々も、飛び入りで参加させてもらって、なんかやらせてほしいな、と思って。スターになりたいわけじゃないけど。

あと、最近私は文化芸術基本法や、障がい者のための文化芸術活動の促進についてなど、必要に駆られて法律を読むことがあるが、その中に、文化芸術活動というものが、自分のための自己実現というパーソナルなものを前提していると、そういう一文があった。今日は例の裁判の判決があった日。そこでコメントなさっていた傍聴者の方の言葉で「子供たちや障がいをもっている人たちのために、心安らかな生活を望んでいるのだ」というようなコメントがあり、そこは、今日のコメント等のなかにもつながる点があり、この事業そのものが社会と色んな意味でつながっている、問題提起をしているんだという気がしている。

安永恵子氏 今年度は格段に露出が高まったんじゃないかなと感じている。本当にたくさんメディアに取り上げられた。サガテレビさんやNHK など…。県民の方がすごく興味を持ってらっしゃるんじゃないかなと思う。実際に足を運んだTシャツ展（がばいアーティストたち）でも、毎年楽しみに訪れている方が声が聴けたりとか、私自身もアールブリュットのことなど発信して、何かある度に声をかけさせていただいているけれど、新聞に載ったり、ラジオに出たり、本当にじわじわと県内に浸透しているんじゃないかと。

また、サンクの良いところは、仕掛けの上手さがあるんじゃないかなと思った。展示のレイアウトも、作品を回遊性がある形で展示されているので、楽しみながら見ることができて、ついつい買ってしまうという、なかなか上手い仕掛けができています。私は閉店間際に行くことしかできなかったけど、レストランの方にいる集団の方が、これを見かけて足を運んでくれたり、自然に目に留まって「いいね～」という方の姿を見ることが出来て企画

の上手さというのを実感しました。

あとは、この展覧会も参加型で準備段階から一般の方がすぐ参加できるような形に決まっていたし、そんな風に、ゲリラ型だと難しいのかもしれないけど、より一般の方が自然に入っていける企画を作っていただけるといいのかなと思う。

永尾友譜氏 今年度はこれまでの取組が、大きな成果として現れたと思います。ゆめタウンでの「がばいアーティストたち これだれが描いたの？ vol.2」、佐賀さいこうフェスでのワークショップ企画「Tシャツに絵を描こう!」や「ゆつつらアートデイ（出張版）」、「スター発掘プロジェクト in 佐賀」など、どれも想定を上回る数値が得られたと思います。次年度以降の更なる取り組みを期待いたします。

福島龍三郎氏 まずは皆様、今年度も誠にありがとうございました。サンクが何を指すのかというのをしっかり言語化したほうが良いというアドバイスをいただきました。それは本当に今から取り組むべきことだなと思っていて、そのとき、何が私たちがこの事業に取り組む出発点なのかと考えたとき、個人的には、僕は障がいのある方たちがすごい好きで、二十数年この仕事をしてくているけども、とても魅力を持っている人たちだなとずっと思っているんですね。その方たちを知ってほしい、その方たちの魅力を知ってほしいという気持ちが原動力だったと個人的には思っています。

アートや文化芸術のようなジャンルが、それを伝えるときにすごく魅力的な分野だなと思うのは、一つはその価値観というか、違う角度から見ることができるということ。僕も専門家じゃないですけど、経済的なこととか、福祉だったら「支援せないかん」とか「自立」とか、そういうことだけじゃない、人間の豊かさとか、そういうものを教えてくれるというか、そういう分野だなと思って、そこが障が

いのある方のもとと持っている魅力とすごくマッチすると思っています。

もう一つは、色々な人たちが出会える場なんだなぁとあらためて思っていて、障がいのある人たちのことを、魅力を知ってほしいといったときに、色んな人たちにこれをきっかけに知ってもらえる、そんな活動になればいいなあと思いながらやってきました。

実際にそういったことを積み重ねていくなかで、今のよう活動になっていますが、本当に様々な方たちが協力してくれて、アイデアをいただき、それをひとつひとつ形にしていくことでサンのプロジェクト等の成果が出てきているなあと思っているの、サンの立ち位置とすれば、色々な人たちをつないでいたり、場を作ったりして、障がいのある人たちの出会いの場であったり、障がいのある人たちでなくても、なにか発散であったり、生きていく上での嬉しさや喜び、必要性を見つけてもらえるような場づくりができればいいなと、個人的には思っています。これからいろいろな方たちと一緒に作っていければと思っています。

第3回協力委員会より



第3回協力委員会

令和元年度 協力委員会	
氏名 (五十音順)	所属
秋山 沙也子	佐賀県立博物館・美術館
江島 真衣	佐賀県文化課
栗山 裕至	佐賀大学教育学部幼小連携教育コース教授
小松原 修	ドラマディレクターうれしの特別支援学校
坂田 茂光	佐賀県障害福祉課
重松 恵梨子	シアターシエマ
嶋立 久人	Shim@Design Lab.
角田 隆浩	障害者支援センター SAKURA
永尾 友譜	株式会社サガテレビ
橋口 泰史	佐賀県文化課
安永 恵子	安永法律事務所
福島 龍三郎	社会福祉法人はる
【第1回】令和1年8月6(火) 【第2回】令和1年12月16日(月) 【第3回】令和2年3月16日(月) 【会場】シアターシエマ	

成果と課題

障害者の芸術活動支援モデル事業での活動を含め、5年目の事業となった。

「表現をどのように " 発信 " するか?」ということに取り組んだ昨年度の経験を土台に

支援者だけでなく誰でも参加できるよう工夫し、風通しの良い事業を目指した。

取り組みの中で、以下のように成果と課題を整理した。

	成果
総括	・研修参加者 92名→203名 ・支援者だけでなく、障がいのあるご本人や福祉と関わりのない学生など、様々な人と関わりながら事業を進めることができた。 ・県内の事業所等における芸術活動の情報を集めることができた。
美術分野	・絵画活動を通して、さまざまな方が自然に関わり合う場を作ることができた。 ・個展の開催、ブランドの立ち上げなど、個人で活動を継続している作家がそれぞれの発信を行い、活動の幅を広げるための後押しができた。 ・37名の支援者が実行委員としてかわり、展覧会づくりに取り組んだ。
舞台芸術分野	・9団体→14団体披露・30名→58名参加 ・出演者の層や表現の категория が多種多様、会場選び、コメンテーター制の導入など、パフォーマンスの発表機会としてモデルを作ることができた。
情報発信	・TV・新聞・ラジオ等メディア露出の増加(12件→23件)や、外部イベントへの出展(2件)等による認知の広がり。

	課題
総括	・芸術活動に関するアンケートの分析・解釈、相談対応等での活用 ・支援者同士のネットワークの充実 ・支援団体としての特色、こだわりや手法の明確化 ・大学との連携の発展
美術分野	・創作につながる機会と支援者を増やすための活動の不足 ・展覧会実行委員会、展覧会の企画内容・運営方法 ・多様な人たちとの協働による展覧会づくり
舞台芸術分野	・パフォーマーのストーリーや背景を知ってもらうこと ・来場者・観客にとっての「お気に入りのパフォーマー」ができること ・舞台芸術につながる機会と支援者を増やすための活動の継続
情報発信	・地域の活動の情報収集と発信 ・ウェブサイトの充実と権利関係の配慮の向上 ・相談対応、アトリエ利用に関する情報の周知 ・相談対応や支援方法のヒントにつながる情報発信

研修チラシ等 印刷物



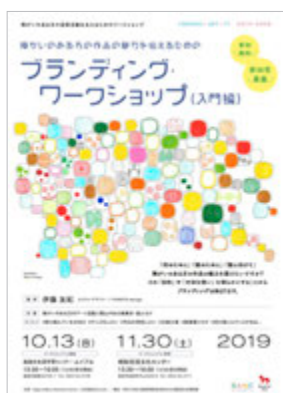
障害のある方の芸術活動を支えるための
スキルアッププログラム



障がいのある方の表現とは？



たくさんの人に見て欲しい！
〇〇な展覧会を一緒につくりませんか？



障害のある方の作品の魅力を伝えるための
ブランディング・ワークショップ(入門編)



日常生活の中で、どんな地味なことでも
魅力に変える 身体表現ワークショップ



障害のある方の創作活動にまつわる
権利擁護「所有権・著作権」



がばいアーティストたち vol.1 チラシ



がばいアーティストたち vol.2 図録



第3回 スター発掘プロジェクト in 佐賀

Web



SANC ウェブサイト



SANC Facebook

各種メディア掲載

メディア		内容
テレビ	サガテレビ かちかちプレス	「スター発掘プロジェクト」の紹介
	サガテレビ かちかちプレス	「がばいアーティストたち」の紹介
	サガテレビ CM	「がばいアーティストたち」 TVCM 放映
	NHK 佐賀 ニュース	「がばいアーティストたち」の紹介
新聞	西日本新聞	SANC の取り組みについての紹介
	佐賀新聞	身体表現ワークショップの紹介
	佐賀新聞	はる大臣表彰 SANC についての紹介
	読売新聞	はる大臣表彰 SANC についての紹介
	毎日新聞	はる大臣表彰 SANC についての紹介
	佐賀新聞	「がばいアーティストたち」の紹介
	佐賀新聞	「がばいアーティストたち」の紹介
	読売新聞	「がばいアーティストたち」の紹介
	佐賀新聞	「スター発掘プロジェクト」の紹介
ラジオ	西日本新聞	「スター発掘プロジェクト」の紹介
	エフエム佐賀 Fromさが	SANC スキルアップ・プログラムの紹介
	NBC ラジオ	SANC スキルアップ・プログラムの紹介
	えびす FM さが FUN 倶楽部・よかかんた〜	SANC および「がばいアーティストたち」の紹介
情報誌	FM 佐賀 Gat's Morning!	「がばいアーティストたち」の紹介
	県民だより	SANC スキルアップ・プログラムの紹介
	県民だより	はる大臣表彰および SANC についての紹介
Webメディア	potari	「障がいのある方の表現とは？」 イベント情報
	potari	「がばいアーティストたち」 展覧会情報



社会福祉法人はる

「私たちの願いは、障がいのある人たちが、自分の人生の主人公として、生涯を通して、地域とともに幸せに暮らしてもらうことです」という理念のもと、子どもから大人まで、生涯を通して地域で暮らすことができる体制を作ること、また、仕事や様々な活動を通して地域の方たちと触れ合ったり、協働することで、障がいのある人たちの生活が豊かになり、地域の理解も深まる活動に力を入れています。

〈実施事業〉

- ☐ 生活介護事業所ライフサポートはる（定員 20 名）
- ☐ 就労継続支援 B 型事業所ワークスペースかん（定員 20 名）
- ☐ 居宅介護事業所ヘルパーステーションはる（行動援護・身体介護・家事援助）
- ☐ グループホーム（定員 31 名）
- ☐ ショートステイ（定員 6 名）
- ☐ 放課後等デイサービス事業所じゃんぶ（定員 10 名）
- ☐ 相談支援事業所はっと
- ☐ Saga ArtBrut Network Center (SANC)
- ☐ 佐賀県強度行動障害支援者養成研修
- ☐ きてみんしゃいカフェ

SAGA ART BRUT NETWORK 2019—2020

令和 1 年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

〔企画・編集・発行〕

社会福祉法人はる

Saga ArtBrut Network Center (SANC)

〒849-0917 佐賀県佐賀市高木瀬町長瀬1168-1

Tel: 0952-37-7078 / Fax: 0952-34-1024

Mail: info@s-brut.net

Web: www.s-brut.net

発行責任者 | 福島 龍三郎（社会福祉法人はる 理事長）

制作・デザイン | 大石 哲也（SANC）

制作 | 嵯峨 昌紀（SANC）

補助 | 令和1年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業

事業にご協力くださいました皆様、誠にありがとうございました。

表紙

「まるから始まる表現」

ワークショップ in アトリエ・サンク

2019年9月7日実施

参加 | 麻生二葉／池田瑞姫／岡美希／加茂賢一

榑ゆりか／瀬戸口楓子／遠部ひかる

成末由莉菜／樋口智美／山下桃佳

写真 | 榑ゆりか

